

## 第25回 市長と話そう会

日 時 : 令和2年2月14日(金)  
19:00～

場 所 : よりみちステーションくむくむ

参加者 : 小林由枝代表他 7名



市長のこども環境学会 2019「こどもにやさしいまちの居場所」での講演をきっかけに、よりみちステーション代表の小林由枝さんの声掛けで子どもの居場所に関して意見交換を行いました。

市長と参加者全員のそれぞれの居場所に対する思いを語り合い、居場所の本質について非常に深い話となりました。以下に内容を抜粋して掲載しております。

### ■意見交換

小林代表: よりみちステーションを立ち上げて8年目となる。保護者から質問や相談が寄せられるが、問題の解決でなく寄り添うことを主としている。よりみちステーションに来る児童に卒業はなく、中高生になってもフラットと立ち寄れる場所。子どもを「尊重する」ことがキーワード。

市 長 :どんな子、どんな境遇、どんな環境でも生まれてきた子を社会で見えていく。できる子を伸ばすだけでなく、山のように裾野を広げていきたい。

子どもや腰の曲がったおじいちゃんを目線の高さでまちづくりをしていきたい。

以前聞いた話で、「支援者の気持ちで支援をしていないか。縫うのが好きな人がいたが、真っすぐでなくガタガタに縫っていた。良かれと思い真っすぐ縫うよう指導したが、縫うのが好きな人にとっては面白くないことだった。」

障がい者がやっておられることを尊重し、寄り添って支援が出来ないか。障がい者が不自由で健常者が自由であるという考えは逆じゃないのか。

子どもの居場所においても子どもの自由さを確保した上で支援していく必要がある。  
1人1人互いを認め、コミュニケーションし共感を生み出し尊重する。

参加者 :学校で支援員をしていたが生徒から元気ももらっていた。知的障がいの児童へ伝え方を教えることで逆に自分が伝え方を学ばされていた。大事なのは子どもの気持ちなのではないか。伝え方、褒め方など支援員として色んなものを見守りから貫っていた。分かりやすい世の中にしたい。人と人とのつながりにおいてニュアンスではなく具体的な言葉が大事。

参加者 :支援というのは難しく画一的な言葉で、寄り添うという言葉が良いと思う。

居場所づくりは支援なのか、居場所に来ることは児童が決めている。来た人が居場所と思えば、そこが居場所。来る人にとって選択の自由があって良い。窮屈な放課後、学童に行っていない児童の場所提供。自由に過ごす場所、自分にとっての居場所。

参加者 : 理念が前面に出てくるのではなく、子どもたちが来たい場所。いろんなパターンの場があって良い。困る困らないでなく、自分らしく居れる場があれば良い。居場所をつくるのではなく、場を提供し、自由に出入り出来る場をつくる。

参加者 : 発達障がい、不登校はレッテル。受け止めてくれる人が増えるといい。ぼちぼちやは、不登校児の行く場所だった。遊ぶこと、したいことを出来れば子どもが安定する。

参加者 : 市長の話を聞いて安心した。物理的な居場所ではなく、人的な居場所。全体としてもっと柔らかくなれば良い。人間1人1人違うということを大人から理解することが大切。